

南風

Kagoshima University Library Bulletin

鹿児島大学図書館報 58号 2002.3

- 1 附属図書館の展望 電子ジャーナルの導入に関してー
- 2 鹿児島大学附属図書館貴重書公開「江戸の趣味生活 薩摩の大名文化 重豪の時代展」開催
- 3 鹿児島大学附属図書館貴重書公開を振り返って
- 5 英国の大学では、オンライン文献データベース・ジャーナルは、もはやジョーシキ?
- 大学間デジタルドライブ、「負け組」にならないために -
- 6 電子的情報の収集・検索システム(電子図書館システム)の概要
- 11 西洋古代史関係洋書の寄贈
- 12 本学関係者著作寄贈図書
- 13 平成13年度 図書館学術文化講演会の開催
- 14 研修報告
- 16 科学研究補助金に係る間接経費(学術図書購入費)により辞書サーバシステム「ネットワークことい」対応辞書を購入
- 16 携帯電話対応版図書館ホームページの利用について

附属図書館の展望ー電子ジャーナルの導入に関してー

中山 右 尚

附属図書館は、全学の理解と協力の下、附属図書館運営委員会をはじめとする図書館諸委員会の活動と、館員の努力によって、着実なあゆみを続けている。しかし、大学と社会状況の変化は速い。そんな変化に対応して、附属図書館も新たな創成に向かって、さらなる一步を踏み出す必要がある。ここでは特に電子ジャーナルの問題について、卑見を述べ、鹿児島大学の大きな発展に期待したい。

学術雑誌の電子ジャーナルは、急速な進展を遂げている。電子ジャーナルをどれだけ多く摂取できるかが、その大学がどれだけ優れた教育を行えるか、またどれだけ多く優れた論文を創出できるかにかかわるので、世界中の大学がこの整備に力を入れることになる。電子ジャーナルの出版社は、まず無料サービス期間を設けて、研究者を誘い、研究者がこの利便性の虜になったところで、有料化に踏み切るという商策をとった。世界の主要な出版社は、2002年1月から有料化を実行した。当館ではその対応のために、昨秋、学長・副学長、各学部長に主要な電子ジャーナル導入についての理解と協力を願い、導入の方向での賛意を得ることができている。この電子ジャーナルの問題点は、出版社の多くが、冊子体の購読実績に応じて、電子ジャーナルの契約料を設定することである。冊子体の外国雑誌は毎年高騰しているの、学内の講座・研究室は、急速に購読雑誌の継続を断念している。本学の購読雑誌タイトルの減少は、すなわち電子ジャーナルの契約料の高騰に連動することになるので、電子ジャーナルの導入は、定額的な予算化が図れない憾みがある。

ということになると、学術雑誌購入に関しては、これまでのような学内研究者・研究室・講座等の単位で購入する仕方を、やはり抜本的に見直して、コア雑誌(各分野に関連度が高く利用頻度の高い雑誌)は電子ジャーナル契約料を含めて、全学の共通経費で賄う仕方しかないという結論になる。この提案はすでに、平成13年7月発行の「図書館資料の整備について」で行っているところであるが、本平成13年度、実際に電子ジャーナルの契約を迫られてみると、焦眉の急の課題であると全学に訴えざるを得ないのである。既に他大学においては、コア雑誌の共通経費化を実現しているところもある。競争的な環境におかれる状況にあって、本学が力量を示すためには、学内研究者の英断と実行あるのみである。受益者負担という仕方を提案する向きもあろうが、出版社は大学という機関と契約するのであり、個人のアクセス件数によつての課金は不可能である。それにこの電子ジャーナルの利用は、教官はもとより大学院生等若手研究者にとって極めて有用であることに思いをいたす必要がある。本学の学術情報の摂取に要する経費については、本学が創出し発信する学術情報のまさに必要経費として確保することが求められているのである。

それではコア雑誌はどのようにして選定するのか、これこそ附属図書館運営委員会が全学委員の名において徹底的に検討しその方途を導くしかないのである。

(なかやま・ゆうしょう 附属図書館長)

鹿児島大学附属図書館貴重書公開

「江戸の趣味生活 薩摩の大名文化 重豪の時代展」開催

附属図書館では、10月24日(水)から30日(火)まで、中央図書館において鹿児島大学附属図書館貴重書公開「江戸の趣味生活 薩摩の大名文化 重豪の時代展」を開催した。これは大学公開の一環として市民の方々に附属図書館が所蔵する貴重な郷土の文化遺産である「玉里文庫」を一般に公開するために平成11年度からはじめたものであり、今回で第3回を迎えた。

「玉里文庫」は薩摩28代藩主島津斉彬の弟である島津久光が収蒐した1万8千9百余冊に及ぶ和書、漢籍、文書等であるが、鎌倉時代以来800年近く続いた島津氏の歴史に関する書物と江戸時代の大名文化に関する貴重な書物が数多く含まれている。今回の展示は18世紀から19世紀にかけての時代を島津25代藩主「島津重豪」に焦点を絞り、「重豪の

時代」、「和歌・漢詩」、「学問」、「諸芸」の四部構成で行った。

引き続き、11月8日(木)から11日(日)まで、川内市歴史資料館において同展を開催した。

また、展示会開催にあわせて、中央図書館においては、10月28日に高津孝法文学部教授による「薩摩の博物図譜「質問本草」について」、丹羽謙治法文学部助教授による「重豪時代の学藝 新出資料をめぐって-」、川内市歴史資料館においては11月11日に原口泉法文学部教授による「島津重豪の生活文化 薩摩のハイカラ事情」、日隈正守教育学部助教授による「新田神社文書について」と題する講演会も開催され、聴衆は熱心に聞き入り講演後の質疑応答も活発に行われた。期間中、学内外から600名ほどが訪れ、好評のうちに終了した。

平成13年度(第3回)鹿児島大学附属図書館貴重書公開

「江戸の趣味生活 薩摩の大名文化 重豪の時代展」展示史料

会期：平成13年10月24日(水)～30日(火)

11月8日(木)～11日(日)

会場：鹿児島大学中央図書館 5階AVホール、貴重書閲覧室

川内市歴史資料館第二展示室

展示資料：第一部 重豪の時代

・朽木昌綱宛重豪書簡 ・古従三位大信公碑 ・仰望節録(鹿児島県立図書館所蔵) ・見聞秘記

第二部 和歌・漢詩

・浪の下草(垂水市教育委員会所蔵) ・松操和歌集 ・赤崎海門歌集(鹿児島県立図書館所蔵)

・月洲先生詩集(鹿児島県立図書館所蔵) ・名山楼詩集

第三部 学問

・君道 ・童蒙須知 ・神代三陵考(鹿児島県立図書館所蔵) ・倭文麻環 ・成形図説 ・質問本草

・本草質問(沖縄県立図書館所蔵) ・鳥名便覧 ・鳩小屋雛形

・鳥賞案子(鹿児島県立図書館所蔵) ・習礼抄 ・義家朝臣鎧着用次第 ・新編島津氏世録正統

・島津世家 ・島津国史 ・南山俗語考 ・長短雑話

・薩摩暦(鈴木俊幸氏所蔵)

第四部 諸藝

・犬追物類鏡 ・犬追物図説 ・華陽皮相 ・示現流聞書喫緊録 ・御家兵法純粋

・謡曲拾葉抄 ・謡曲(宝生流謡本) ・白鷺洲

・池坊流立花図巻(照国神社所蔵) ・古今香式 ・略可法 ・米庵先生蔵筆譜 ・大草殿聞書

・正月祝儀飾之絵図 ・料理塩梅集 ・碁経玉田鋤 ・将碁早指南

記念講演：高津 孝(鹿児島大学法文学部教授)「薩摩の博物図譜「質問本草」について」(10/28)

丹羽謙治(鹿児島大学法文学部助教授)「重豪時代の学藝 - 新出資料をめぐって - 」(10/28)

原口 泉(鹿児島大学法文学部教授)「島津重豪の生活文化 - 薩摩のハイカラ事情 - 」(11/11)

日隈正守(鹿児島大学教育学部助教授)「新田神社文書について」(11/11)



鹿児島大学附属図書館貴重書公開を振り返って

諸岡 静児

附属図書館では平成11年度から大学公開の一環として貴重書公開を下記のとおり行ってきた。

| | 名称(会場) | 入場者数 |
|-----------------|--------------------------------------|------|
| 平成11年度 (第1回) | 薩摩の文化遺産 玉里文庫展 (中央図書館) | 471 |
| 平成12年度 (第2回) | 江戸のまなざし 薩摩の名所図会展 (中央図書館) | 272 |
| | 薩摩の文化遺産 玉里文庫展 (鹿児島県立図書館奄美分館) | 79 |
| 平成13年度 (第3回) | 江戸の趣味生活 薩摩の大名文化 重豪の時代展 (中央図書館) | 324 |
| | 江戸の趣味生活 薩摩の大名文化 重豪の時代展 (川内市歴史資料館) | 204 |

貴重書公開では、第1回からアンケートをお願いしてきており、今回の回収率は55パーセントであった。アンケートは感じた直後の正直な感想が書かれている。そこで、アンケートの「どのようにして知りましたか?」、「ご覧になってどうでしたか?」、「自由記述」を中心に貴重書公開を振り返って見る。

「どのようにして知りましたか?」についての回答は、ポスター39%、マスコミ(新聞・テレビ・ラジオ)29%と3回目で初めてポスターがマスコミを超えた。ちなみに、第1回ポスター17%、マスコミ63%、第2回ポスター19%、マスコミ

28%であった。

この設問については、自由記述にも多くの人が記入しており、自由記述の回答の約10%が“広報不足”、“もっと積極的に広報を”、“図書館は広報が下手”など苦言が呈されている。図書館としては第1回開催から館長以下部課長が県教委、市教委などの教育機関や市内のテレビ局、新聞社などのマスコミを積極的に回り広報を行ってきた。

また、今回は図書館内で学長に記者会見を開いてもらうなど、積極的かつ広範囲に広報活動を行ったと思うのだが。マスコミで報道されたとしても当人の目に触れな

ければ広報活動不足なのであろう。

ポスターは例年、学内はもとより、県内の大学図書館、公共図書館、文化施設へもれなく配布し掲示の依頼を行っていたが、その成果が現れはじめたのであろうか。

図書館が行う広報活動はマスコミにお願いすることも大切ではあるが、ポスターを中心にいき、日頃から地道に一般の方々に図書館を知ってもらうことが大切である。

「ご覧になってどうでしたか？」については、95%が“よかった”と回答している。入場者のほとんどの方に満足してもらったのではないかと考えられる。「自由記述」では、感謝・お礼の言葉が60%を占めており、そのほとんどが“展示会を今後も続けてほしい”、“貴重な資料を見ることが出来てよかった”などであり、図書館としても可能な限り貴重書公開を継続していく努力をすべきである。

その他、「自由記述」での主な意見は、“展示資料に触れてみたい”、“頁をめくってみたい”という現物を見るだけでなく触れてみたいという意見で約20%を占めていた。これについては第2回の奄美分館での開催から複製資料を展示し触れて見ることが出来るようにした。回答では非常に好評であったが、今度は複製資料をもっと増やしてほしいとの意見が出てきていた。

展示スペースに限界もあり、今後は複製資料だけでなく電子図書館の充実が必要になってくる。しかし、入場者のほとんどは“実物”、“本物”を見にくるのであり、貴重書公開は資料中心の展示が本来の姿である。

これからも、アンケート調査結果を分析し、「すぐに対応できること」、「長期的に対応すること」、「実現不可能なこと」があるが、図書館も回答結果に真摯な姿勢で耳を傾ける必要がある。

まだまだ図書館として改善すべき点は多々あると思われるが、今回、川内市歴史資料館で開催してみて設備の重要性を

痛感した。特に照明の効果は絶大であり、中央図書館での展示とは別の資料を展示しているかのようであった。図書館で開催するには限界があるが、可能な限り設備、備品も準備しておく必要があると思われる。他には公開に伴う資料の補修、地方での開催では資料の移送・保険の費用など予算的措置が必要である。

また、展示技術の研修を行う、玉里文庫の知識の研鑽など職員が取り組むべき課題も多々ある。

最後に、いかにして入場者を増やしていくかが最も重要な課題であるが、今回は2会場合わせて528人。毎年開催初日は一人も来ないのではないかと不安がつきまとうが、アンケート結果は95%が貴重書公開は“よかった”と答えており、入場者数としては、成功といえるかどうかはわからないが文化的効果は充分にあったと思われる。

最後の最後に一言。過去3回の貴重書公開で最も印象に残っているのは、奄美分館での開催である。冷たい雨の降る中、長谷川奄美分館長と二人で団地の郵便受けに不審そうな顔をされながらもチラシを配って歩き、初日は最初誰も来なくて、分館で行われていた読書会に参加している方をお願いして入場してもらったこと。土砂降りの中、中山館長と最後の挨拶回りをして、やっと帰ることが出来ると空港へ行くと飛行機は飛ばず、名瀬市内へ逆戻り、大変でした。でも、鶏飯と黒糖焼酎の味は忘れられない。

以上

(もろおか・せいじ 附属図書館情報サービス課資料サービス係長)



英国の大学では、オンライン文献データベース・ジャーナルは、もはやジョーシキ？ - 大学間デジタルデバイド、「負け組」にならないために -

桜井 芳生

【もはや、図書館と情報処理センターは、別物ではない？】

みなさんこんにちは。法文学部人文学科で現代メディア文化論を担当しております桜井と申します。

ただいま鹿児島県育英財団さんのご援助・学内のみなさまのご高配を得て、(ロンドン大学の一つのカレッジ)ロンドン・スクール・オブ・エコノミクスで、研修させていただいております。さすがにノーベル経済学賞受賞者を輩出している大学だけあって、とても勉強になることが多いです。ここでは、図書館・文献データベース・オンラインジャーナルに関して、感じたことを述べてみましょう。

まず、図書館がすごい！。社会科学系大学にとっては、図書館こそが、教育・研究の中心であると考えているようで、図書館の運営には、気合いとお金をかけているようです。数百人分ある閲覧席のほぼ半数(300ほど)に、端末(PC)が備わっています。その他の机の多くにも、情報コンセントがついていて、自分のラップトップパソコンをつなぐことができます。学生は、自分の図書館IDで、端末にログオンすることができ、メール・インターネット・学内ネットワークを、自由に利用します。大部分の学生は、朝登校してから夜帰宅するまで、授業のある時間帯以外を、ほとんど、この図書館の端末のまゝで過ごすようです。ITヘルプの要員も常駐していて、学生のITに関するどんな些末な疑問にでもその場で解決をあたえます。日本の大学にありがちな「ITに詳しいひとならすぐわかることなのに、誰に聞いていいかわからなくて、ちょっとしたつまずきで二三日、勉強(仕事)が止まってしまう」ということがありません。いまや「図書館」と「情報処理センター」を「分けて考える」こと自体が時代おくれなのでしょう。

【Social Sciences Citation Index の威力を痛感】

そんなわけで、図書館がITと「もはや不可分」ということもあって、「IT・の使い方」「オンラインデータベース・××の使い方」とかいった無料講習会が図書館のスタッフによって頻繁におこなわれています。私もいくつかにでてみました。その中でやはり一番参考になったのが、ソーシャル・サイエンス・サイテーション・インデックス(以下INDEX)についてです。(自然科学のサイエンス・サイテーション・インデックスは、ほとんどの理系の先生方がご存じでしょう。また、「人文系」の同等INDEXもあります)。

いままでですと、外国雑誌の論文コピーを取り寄せて、その言及文献をまた取り寄せて、、、と、一ステップごとに「時間」がかかりましたが、このINDEXを使うと、キーワードないしパーソンを打ち込むと、雑誌論文の要約がすぐ表示され、その論文の「引用文献」「被引用文献」がすべて一覧でき、クリックするとその表示されている「引用文献ないし被引用文献」の要約にジャンプし、そこにも、その文献の「引用文献」「被引用文献」一覧でき、、、と、まさに、「学术论文の引用・被引用のネットワーク」の中を「タイムラグなしでネットサーフィン」できます。特に、「被引用文献」を挙示するところが決定的です。いままでのいもづる式文献探索では、「今ある文献より新しい文献」を、たどることができませんでした。

日本のほとんどの大学でも、NII(国立情報学研究所)のデータベースで、

このINDEXを使えるようですが、コマンド方式・時間料金制・登録制・学部生の利用は困難、だったと思います。こちらでは、フツの学部生が、卒論・タームペーパーの資料探しに、自分の図書館IDだけで、気楽にこのINDEXにアクセスして、文献を探しまくってます。ウーン、鹿大の学生の情報・文献収集の実状と比べると、「タメ息」がです。

【オンラインジャーナル、紙の雑誌をコピーする時代ではない？】

このようなオンライン文献インデックスと深くリンクしているのが、オンラインジャーナルです。主要学術雑誌のかなり部分がすでにオンライン化されています。ここまではみなさんもお存じでしょう。すごいのは、図書館のカタログ（目録）で、ある雑誌がヒットすると、そのカタログの画面にオンラインジャーナルへのアクセスがリンク（リンク）していることです。つまり、図書館の目録をスクリーン上で検索する作業の延長で「クリック、くりくりっ」とするだけで、論文の「実物」が、PDFファイルとして入手できます。図書館の全階にプリンターがあるので、ボタン一つで、プリントアウトもできます。今後

は、学術雑誌の「実物（冊子）」は、図書館の棚にいわば「標本」のように保存されるだけで、ほとんどの人は、オンラインからの論文を入手する、というようになっていくのでしょうか。

【大学間デジタルデバインド？（キビシー状況）】

もはや、このようなオンラインINDEX・ジャーナル（あと、ここでは触れませんが、データベース・データアーカイブへのアクセス）なしで、教育・研究するのは、「みずからを、情報鎖国の状態におく」ようなものだと思います。が、ご存じのように、これらのオンライン・ソースは、「安く」ないようです。しかし、いまや、われわれ文系の大学人をも含めて、これらのオンライン・ソースは、教育・研究にとって、死活問題になりつつあると思います。ぜひ、本学でも、全学的コンセンサスのもとに、大学間デジタルデバインドの「負け組」にならないように、戦略方針をとっていただきたいと思います。（すでにこの方向で、ご尽力くださっている本学スタッフのかたがたに、敬意を表します）。

（さくらい・よしお 法文学部助教授）

電子的情報の収集・検索システム（電子図書館システム）の概要

森 園 壽

1. はじめに

平成12年11月末、平成12年度補正予算で「電子的情報の収集・検索システム」の経費が措置された。これにより、早速システム構築の作業を開始した。

まずはシステムの構想に始まり、仕様書の作成、入札関連の作業、そして導入まで目まぐるしい日々が続いたが、何とか年度内に一連の作業を終えた。この間、総合情報処理センターをはじめ、多くの方々にお知恵を拝借するとともにご協力いただいたことをここに感謝したい。

システム構築に当たっては、大別して3つのシステムを構成した。まず第一に、本学で所蔵または生産される学術情報のコンテンツ作成機能とその蓄積機能及びこれらの情報を提供するための横断的検索機能からなる「電子化情報提供システム」、第二に、学術的二次資料の商用データベースを提供するための「文献情報提供システム」、第三に、CD-ROM(DVD-ROM)教材を提供するための「デジタルライブラリーシステム」となっている。

また、これらのシステムが有効に活用されるための、クライアント群、ドキュメントデリバリー・システムで構成されている。

学内で所蔵・生産される学術情報は、公開されるべきことであるが、過去において方法としても手段としても不十分であった。これら学術情報の掘り起こしを行い、積極的に収集・提供することを目的にシステム構築を行った。また、他大学・諸外国のデータベースを相互に利用できる環境を構築するため、国際標準プロトコル（Z39.50）を導入した。

なお、学内における情報提供の環境整備（セキュリティ対策、ユーザーインターフェース）と商用データベース（ネットワーク対応版、スタンドアロン対応版）の著作権保護の観点に留意した。

大学図書館における電子図書館的機能の充実強化が叫ばれる中、今回のシステム導入により、飛躍的に利用環境が整備された。今後、導入システムにおけるコンテンツの充実整備に努め、大学における情報発信基地としての役割を担いたい。

2. サービス内容や機能とそのポイント

(1) 提供しているサービス内容の概要

本学で所蔵及び生産される学術情報データベース提供

- a. 本学所蔵の図書・雑誌の書誌及び所在情報を提供。
- b. 貴重資料（玉里文庫、岩元文庫、松本文庫）の書誌情報とこれまで学内教育改善推進費等で電子化（CD-R）している画像情報をリンクして提供。
- c. 本学発行の紀要・研究報告及び学位論文の目次情報（著者、論題、誌名、巻号発行年、頁、抄録等）と論文情報をリンクして提供。
- d. 本学所蔵のエルンスト・プッチェル氏（旧制第七高等学校ドイツ語教師）の楽譜を画像化し、また、鹿兒島大学創立50周年記念協賛事業のプッチェル作品演奏会の音

楽情報を提供。

なお、a.b.c.については横断検索機能がある。

学術的二次資料（商用データベース）の提供

学術的二次資料の提供は、以前より提供してきたが、今回ユーザーインターフェースを改善し、より使い易いWEBブラウザ環境下での利用を実現した。

a. ERLサーバシステム

MEDLINE EXPRESS, Biological Abstracts, AGRICOLA外12データベースを提供。

b. CD-Terminalサーバシステム

雑誌記事索引、医学中央雑誌等の日本語データベースを提供。

c. ことといサーバシステム

広辞苑、理化学辞典外、日本語関係辞書事典のデータベースを学内ネットワークで提供。

図書館向けCD-ROM教材の提供

著作権上ネットワーク利用できないCD-ROM（DVD-ROM）を中央図書館、2分館それぞれにジュークボックスで一括管理してマルチメディア関係の図鑑・年表等を提供。

EpicWin7000(ILL対応)の導入

文献画像伝送システムであるEpicWinを中央図書館、分館に導入し、図書館間文献複写業務（ILL）の省力化・利便性を高めた。

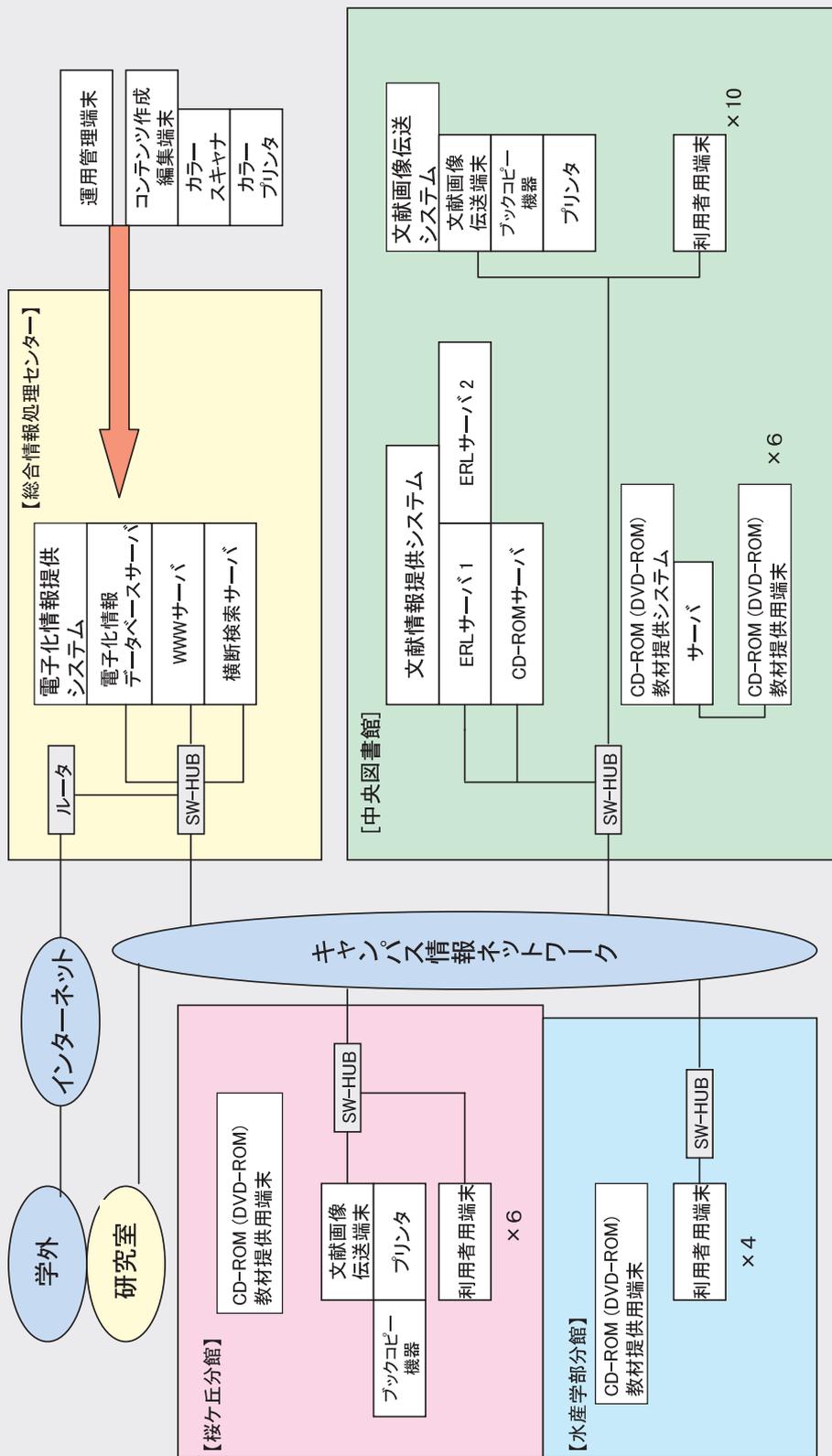
利用者用端末の導入

利用者用端末を20台増設し、利用者の利便性を高めた。

（もりぞの・ひさし 附属図書館情報管理課
図書館専門員）

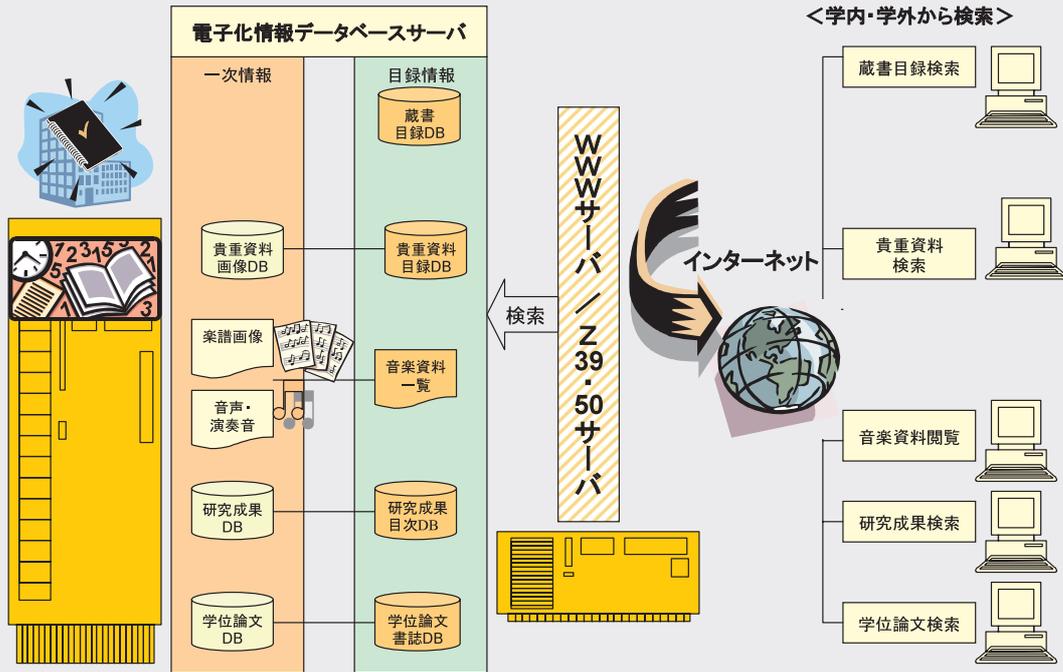


電子的情報の収集・検索システム構成図



1. 電子化情報提供システム

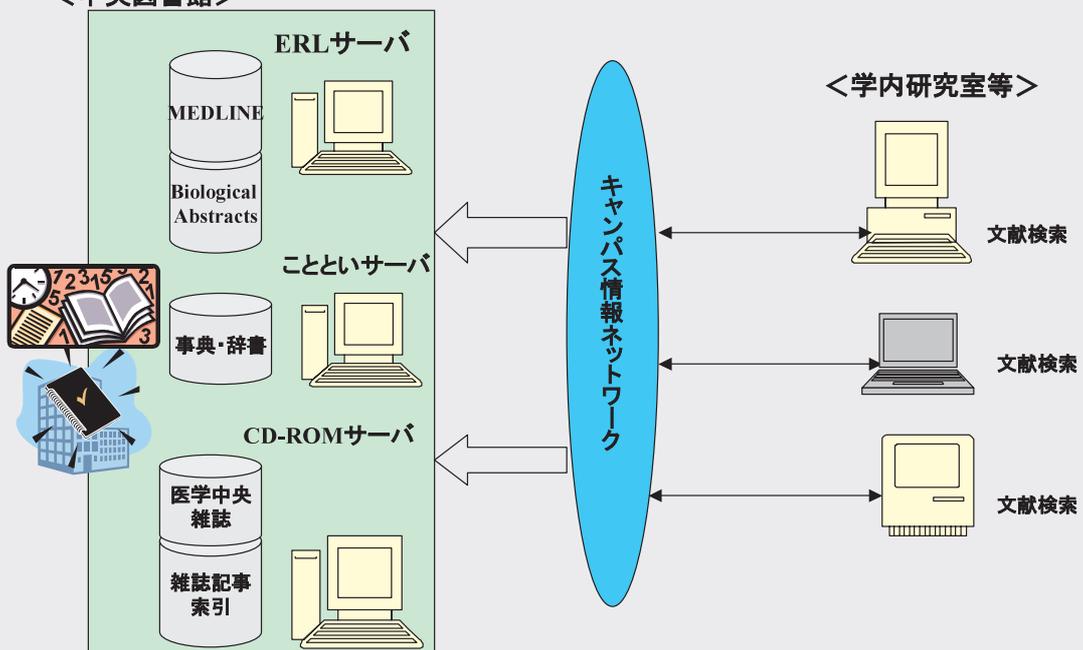
- ・サービス対象: 学内・学外
- ・本学で所蔵及び生産される学術情報の提供



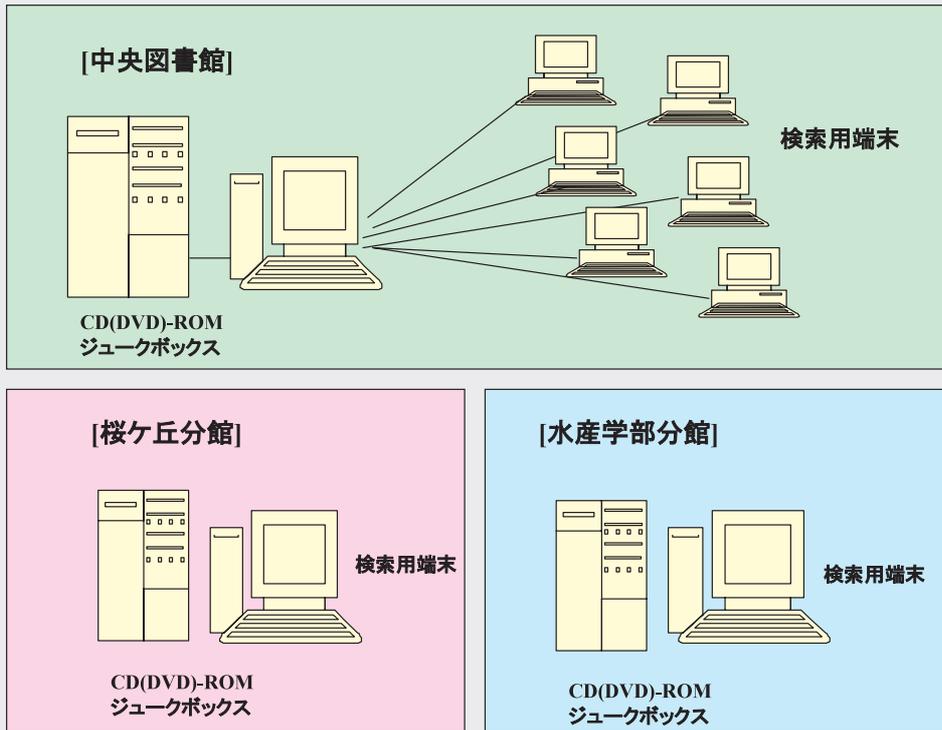
2. 文献情報提供システム

- ・サービス対象: 学内
- ・学術的二次資料(索引誌・抄録誌)・事典辞書の商用データベース

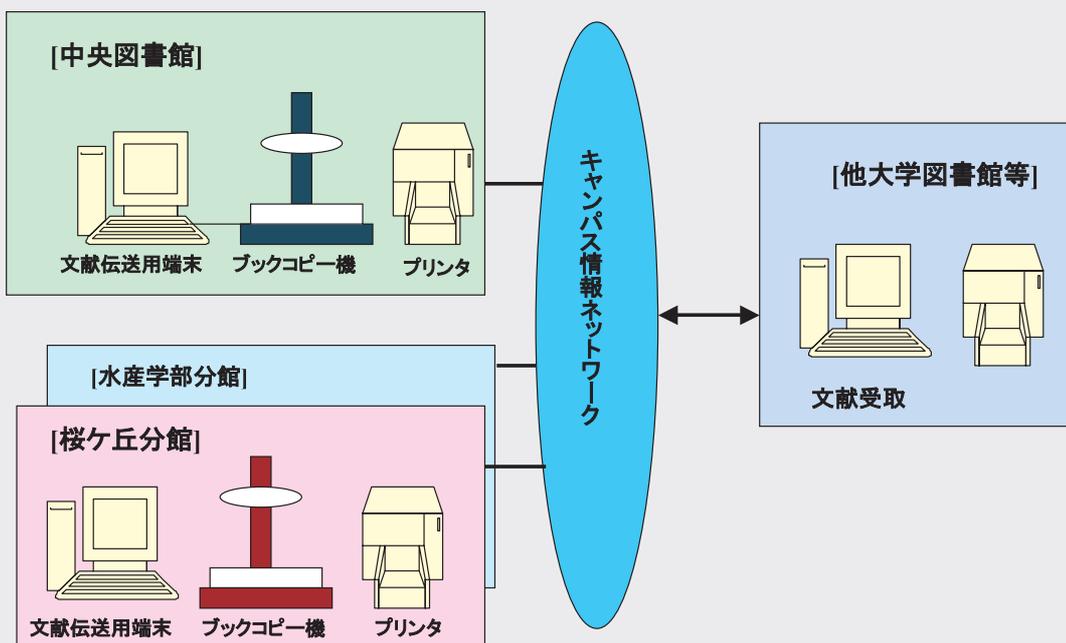
<中央図書館>



3. CD-ROM(DVD-ROM)メディア 教材提供システム
 ・図書館向けCD-ROM(DVD-ROM)教材視聴覚システム



4. 文献画像伝送システム
 ・図書館間文献複写業務(ILL)における文献伝送システム



西洋古代史関係洋書の寄贈

伊 藤 正

同じ大学に、学部は異なるけれども、西洋古代史を専門にしている教官が二人いるという事実はまことに珍しく貴重である。私は教育学部に赴任して10年になるが、法文学部の小田洋教授は赴任して30年以上に及ぶ。この間二人は自分の研究に必要な西洋古代史関係の図書の収集に力を注いできた。ただ限られた研究費では自分の研究に必要な図書を思う存分購入できないという事情に加えて、例えば私の場合は、私の研究には必要でない西洋史一般の基本文献を、洋書・和書双方に亘って、購入しなければならないという事情があった。というのは、教育学部では私一人が西洋史を担当しているからであり、私の研究室のゼミ生や院生が必ずしも西洋古代史で論文を書くとは限らないからである。法文学部には西洋史の教官が小田教授を含めて3人いらっしゃるの、研究図書購入に当たっては私より明らかに恵まれている。

このような状況の中で、上智大学名誉教授三浦一郎氏の西洋古代史関係洋書寄贈のお話は願ってもないことであった。実は三浦先生は上智大学での私の恩師に当たり、先生の蔵書2万冊以上が早稲田大学図書館に一括寄贈されたことを、私も聞き及んでいた。ところが、一昨年、早稲田大学図書館図書課の雪嶋宏一氏よりギリシア・ローマ古代史関係の洋書で重複するものを鹿児島大学附属図書館に寄贈したいが、如何なものかという相談を受けたのである。私は雪嶋氏と面識があったし、雪嶋氏は三浦先生と私が師弟関係にあることをもちろん知っておられたので、この話を私のところへ持ってこられたのだと思った。私はこのことを本学附属図書館長中山右尚教授に相談し、この度やっと寄贈図書の受け入れが実現したのである。間接的にではあるが、本学

附属図書館に三浦先生の貴重な洋書を寄贈して下さったご子息三浦久利夫氏に、この場をお借りして、心より感謝申し上げます。

親子二代に亘る学者のお家柄ということもあって、先生のご蔵書の多さは夙に有名であり、その本の重さでご自宅の書庫の床が抜けたという逸話が残っている。先生のご専門が古代ギリシア史ということもあり、この度寄贈して頂いた洋書の大半が古代ギリシア史関係の図書である。その他に、古代ローマ史・西洋古典学・考古学・美術史学・民俗学などの洋書も含まれている。数量は雑誌二点を含む744冊。テキストの使用言語は大半が英語。またドイツ語・フランス語・ロシア語など若干数含まれる。西洋古代史を研究する者にとって今日ではなかなか手に入りにくい貴重本も少なからず見受けられる。なによりもまた、西洋古代史関係の洋書が一つ所にこれだけ纏まって存在していることの意義は大きい。図書館職員の方をお願いして寄贈図書目録を作成して頂いたので、できるだけ多くの人にこれらの図書を利用して頂き、南九州の西洋古代史研究の拠点に行きたいと思う。

最後に、寄贈の仲介役を務めて下さった早稲田大学図書館の雪嶋宏一氏並びに小川糸子氏、本学附属図書館長中山右尚教授をはじめ同図書館職員の方々のご厚意に対し心から御礼申し上げたい。

(いとう・ただし 教育学部助教授)

本学関係者著作寄贈図書

附属図書館では、本学に関係する方々の著書を積極的に収集しております。著作物を刊行された節はご寄贈くださるようお願いいたします。今回は次の方々から著書をご寄贈いただきました。厚くお礼申し上げます。

配架場所： 中央図書館・・本学関係者著作コーナー，各分館・・開架書架

中央図書館

- 池川 直 (教育学部助教授)
池川直彫刻集 / 池川直著
東京 東洋館出版社 2000.12
- 梅野正信 (教育学部助教授)
和歌森太郎の戦後史：歴史教育と歴史学の狭間で / 梅野正信著
東京 教育史料出版会 2001.10
- 木部暢子 (法文学部教授)
西南部九州二型アクセントの研究 / 木部暢子著
東京 勉誠出版 2000.2
- 五味克夫 (名誉教授)
旧薩藩御城下絵図索引 / 塩満郁夫[ほか]編
鹿児島 鹿児島県史料拾遺刊行会 2001.8
- 西川匡英 (農学部教授)
森林GIS入門：これからの森林管理のために / 木平勇吉[ほか]著
東京 日本林業技術協会 1998.3
- 森脇 宏 (法文学部教授)
日本の地形 7 九州・南西諸島 / 町田洋[ほか]著
東京 東京大学出版会 2001.12

- mission / edited by K.Fujitaka ...[et al.].
Chiba : National Institute of Radiological Science, c1999
- 馬嶋秀行 (歯学部教授)
Exploring future research strategies in space radiation sciences : proceedings of the 2nd International Space Workshop 2000, February 16-18, 2000, Chiba, Japan in cooperation with NASDA / edited by Hideyuki J. Majima, Kazunobu Fujitaka.Tokyo : Iryokagakusha, 2000

水産学部分館

- 野呂忠秀(水産学部教授)
Towards sustainable management of the Straits of Malacca : Proceedings of the International Conference on the Straits of Malacca, 19-22 April 1999, Malacca, Malaysia / ed.by M. Shariff, et al. Serdang [Malaysia] : Malacca Straits Research and Development Centre (MASDEC), Faculty of Science and Environmental Studies, Universiti Putra Malaysia, 2000.3
- 市川 洋(水産学部教授)
黒潮 / 茶園正明、市川 洋著 春苑堂書店, 2001.12 (かごしま文庫 ; 71)

桜ヶ丘分館

- 馬嶋秀行 (歯学部教授)
Risk evaluation of cosmic-ray exposure in long-term manned space



平成13年度 図書館学術文化講演会の開催

日時：平成14年2月22日 午後2時 - 5時
場所：中央図書館5階AVホール

図書館では毎年図書館講演会を開催し図書館員の資質向上を図ってきた。これまで聴講対象者を鹿児島県大学図書館協議会加盟館の図書館員としてきたが、今年度は、「学術文化講演会」と銘打って学内の学生・教職員にも呼びかけて開催した。

また、講師陣も出版編集や新聞製作のエキスパートの方をお願いして東京・大阪からきていただいた。

聴講者は鹿児島県内の大学図書館職員、学内の学生・教職員が大多数であったが、数名の一般市民の参加もあった。

講演 1

演題：近代日本の出版事情

講師：佐山辰夫（元・小学館編集長）

佐山氏は、小学館の編集長として長年文学関係の出版事業に携わって来られた方で、戦後出版の金字塔である「新編・日本古典文学全集（全48巻）」の編纂や「全集樋口一葉（全4巻）」瀬戸内寂聴「女人源氏物語（全5巻）」など多数の著作を手がけてこられた。

講演では、「編集者は著者の黒子に徹する」など、編集者から見た出版界の興味深い内容であった。また、小学館の創業（大正11年）

から現在まで80年、出版社としての経営方針（先見性、実行力、対応力）や近代日本の出版の歴史を時事問題を交えながら講演していただいた。

講演 2

演題：裏側から見た新聞紙

講師：辻川正司（読売新聞社社友）

辻川氏は、読売新聞大阪本社社の整理部を中心に活躍された方である。

講演では、新聞製作の活版印刷時代の紙面づくりの苦労話や、その時々的事件・スクープの話や紙面づくりでのトップ記事の扱い、見出しやレイアウト作りの面白さなど、かねて何気なく読んでいた新聞の奥深さを感じさせられる講演であった。

また、新聞製作がコンピュータ処理される時代にあって、システム化の難しさや活版印刷の時代との相違点など講演していただいた。

出版や新聞製作の第一線で活躍されたお二人の講演会は、興味の尽きない話ばかりで、50余名の聴講者も熱心に聞き入っていた。



研修報告

平成13年度大学図書館職員長期研修

日時：平成13年7月9日～27日 場所：図書館情報大学ほか

高田 宏 昭

平成13年7月9日～27日までの3週間、東京、つくば市で開催された、大学図書館職員長期研修に参加する機会をいただきました。この研修は中堅職員を対象に大学図書館職員の資質と能力の向上、大学図書館の情報提供サービス体制を充実することを目的として、文部科学省、図書館情報大学の主催で毎年開催されています。今回の参加者は全国の国・私立大学の図書館職員33名でした。

さて、研修の内容ですが、現在の大学図書館にとってタイムリーなテーマである、電子ジャーナル、電子図書館に関する講義等が多く、講義では電子ジャーナルの契約などの今後の動向、またグループ討議では他大学の人達と電子ジャーナル、電子図書館について、それぞれの環境や問題点など意見交換ができたのは非常に有意義でしたし、研修後の飲み会にケーション(?)で人的交流を図ることもできたことは大きな収穫でした。今後はこの研修で得た情報と人的ネットワークを業務に活かしていきたいと思えます。

(たかだ・ひろあき 附属図書館情報サービス課参考調査係長)

第11回九州地区医学図書館員セミナー

日時：平成13年9月20日 場所：産業医科大学

川崎 千由美

平成13年9月20日に産業医科大学(北九州市)で開催された九州地区医学図書館員セミナーに参加しました。このセミナーは九州地区の医学系図書館間で、各館の現状報告や問題点などを発表し、それについて意見を交換し、医学系図書館員としての資質向上等を目標として毎年開催されます。

今年の参加館は国立6大学、私立5大学の計11大学でした。

発表内容ですが、医学図書館にとっては、

常に頭の痛い文献複写業務、変動が激しい電子ジャーナルが中心となりましたが、通常、耳にすることのない病院図書室の現状も報告され、それぞれに、活発な意見が交換されました。

日頃、特にお世話になっている九州地区医学系大学の方々との意見交換は、大変有意義で、得ることも多かったです。

(かわさき・ちゆみ 附属図書館情報管理課桜ヶ丘分館管理係)

ワークショップ「学術コミュニケーションの最新動向」

日時：平成13年11月7日 場所：国立情報学研究所

塩満 和枝

平成13年11月7日、開催された国立情報学研究所主催の標記ワークショップに参加しました。参加者は研究者や図書館員など42名。まず、次のような講演がおこなわれました。

- (1) 土屋俊氏「日本における学術コミュニケーションの全般的状況について(外国雑誌“エルゼビア問題”と特定と電子ジャーナルの問題であると明言されました。)
- (2) 「日本の研究者の立場から 学術コミュニケーションの動向」(物理学の世界を

例に学術情報の発信・流通についての最近の状況)

- (3) Martin Richardson 氏「海外の状況について」(電子ジャーナルに関する最新のトピック)これは日本語の通訳付き

いずれも研究者や図書館員にとって興味深い内容でした。引き続いて行われた討論の場でも活発な意見が交わされました。

このワークショップを通して、多くの知見を得ることができ大変有意義でした。

(しおみつ・かずえ 附属図書館情報管理課桜ヶ丘分館管理係長)

研修報告

「2001年Dublin Coreとメタデータおよびその応用に関する国際会議」のチュートリアル

日時：平成13年10月24日 場所：学術総合センター

高城章代

ネットワーク上の情報資源を、一冊の蔵書をめくような感覚で利用できるようになってきた。これは検索エンジンサービスのお陰であるが、もっと主題へのアクセスを高められるような洗練された検索システムの必要性を感じることもしばしばである。

メタデータは「Information for information (情報に関する情報)」と定義されている。図書館では長い間“目録”というメタデータを生成し続けてきた。しかしながら、ネットワーク上の情報資源には従来の目録では対応できない。また、検索エンジンによる検索にも限界がある。などの問題から情報資源を効率的に発見することを目的としたメタデータシステムが必要になってくる。メタデータシステムは様々な機関で提案されているが、Dublin Core (1995年Ohio州Dublinでのワークショップに由来している)はそのシステムの一つである。

今回のチュートリアルのプログラムは次のとおりであった。

- 1 . Introduction to Dublin Core Metadata / Eric Jul (OCLC, USA)
- 2 . Introduction to Resource Description / Eric Jul (OCLC, USA)
- 3 . Introduction to Application Profile : Namespaces, schemas, and application profiles / Andy Powell and Rachel Heery (UKOLN, UK)

Dublin Coreではデータを記述するために15の要素(elements)を定義している。また、要素に修飾子(qualifier)、要素の値を記述するための基準(scheme)を与えることで、より精度の高いデータが記述できるようになっている。記述形式はW3Cの勧告するRDF(Resource Description Framework)に基づくことになっている。

今回は、京都大学の長尾真氏による基調講演「マルチメディア情報のためのメタデータ」も聞くことができた。情報コンテンツに付属した情報を"attributive tag"として"content tag"とは別に扱い、知的所有権、加工条件、配布条件などの情報を持たせるといふ話は、大変興味深いものであったし、同時にマルチメディア情報の扱いのむずかしさも感じた。

国立情報学研究所でもネットワーク上の情報資源の取扱いについて検討が行われており、平成14年度からメタデータデータベース作成システムの試行運用が開始されることになっている。これは目録システムと同じように大学図書館などの共同分担作成方式となっていて、データはDublin coreに準拠することになっている。

膨大なネット資源に対しては、「メタデータの自動生成システム」、「セマンティック・ウェブ」の出現もたいへん気になるところである。

(たき・あきよ 附属図書館情報管理課情報システム係主任)

第14回国立大学図書館協議会シンポジウム(西地区)

日時：平成13年11月28日～29日 場所：京都大学附属図書館

能勢明雄

第14回国立大学図書館協議会シンポジウムが、平成13年11月28日(水)、29日(木)「電子ジャーナルとコンソーシアムの形成」をテーマに京都大学附属図書館で開催されました。基調講演として、「電子ジャーナルと大学図書館」千葉大学 土屋俊教授、「電子ジャーナルとコンソーシアム」北海道大学附属図書館事務部長 坂上光明・国立大学図書館協議会コンソーシアムによる電子ジャーナルの導入・利用とコンソーシアムの役割、大学図書館にとっての課題、今後の課題等の有意義なご意見を拝聴する機会がありました。

その後、それぞれの大学図書館が取り組んでい

る電子ジャーナルについての事例報告と活発な討議が行なわれました。

今回のシンポジウムに参加して、全国的には、電子ジャーナルコンソーシアム形成の必要性、各大学では、各学部学科等にとらわれない大学全体として、研究者が先端的研究の水準を維持し、教育・研究に必要な学術雑誌を安定的・効率的に利用できる研究環境の整備の必要性を感じました。そのため、全国的な協力が必要であり、また各大学の全学的なさらなる努力も必要であると思いました。

(のせ・あきお 附属図書館情報管理課資料受入係長)

科学研究補助金に係る間接経費（学術図書購入費）により 辞書サーバシステム「ネットワークこととい」対応辞書を購入

平成13年度から科学研究費補助金について、間接経費が措置されることとなった。これを受けて大学全体の機能向上に要する経費の中で学術図書の整備充実のための学術図書購入費が、附属図書館に措置された。図書館では第161回附属図書館運営委員会において審議した結果、全学問分野に亘り、かつ教育研究に広く役立つという視点からネットワーク対応の下記の辞書を購入しサービスを実施することにした。

利用の仕方は、図書館ホームページの「電子図書館」「辞書・事典サーバ(こととい)」からアクセスできる。現在利用できる辞書事典は次のとおりである。

| | | |
|-----------------|------------------|----------------|
| 広辞苑第5版 | 近代日本総合年表(国外) | 機械工学用語対訳辞典 |
| 日本文化総合年表(総合) | 理化学辞典第5版 | 化学・農学用語対訳辞典 |
| 近代日本総合年表(総合) | ビジネス技術実用英語大辞典第3版 | ビジネス・法律用語対訳辞典 |
| 日本文化総合年表(政治・社会) | コンピュータ用語辞典第3版 | 電気・電子・情報用語対訳辞典 |
| 近代日本総合年表(政治・社会) | 最新医学大辞典第2版 | 建築・土木用語対訳辞典 |
| 日本文化総合年表(学術・芸術) | 岩波日本語語彙体系 | 心理学辞典 |
| 近代日本総合年表(学術・芸術) | 岩波生物学辞典第四版 | 有斐閣法律用語辞典第2版 |
| 日本文化総合年表(国外) | バイオ・メディカル用語対訳辞典 | |

携帯電話対応版図書館ホームページの利用について

携帯電話から図書館ホームページにアクセスすることが出来るようになりました。i-mode、EZWeb、J-Skyのいずれかに対応した携帯電話をお持ちの方はどこからでも利用できます。

このURLに直接アクセスして頂きますと右記のメニューが利用出来ます。



携帯電話用の図書館ホームページ

i-mode・EZWeb・J-Sky 対応

URL は <http://www.lib.kagoshima-u.ac.jp/kopac>

*** 機能**

- 1 図書館からのお知らせ
- 2 蔵書検索 (本学所蔵の図書・雑誌を探す)
- 3 貸出状況 (今、自分が借りている圖書の確認)

編集後記

インターネットという名の妖怪が世界をさまよっている。大量の情報が洪水のごとく流れている。まさに「ゆく河の流れは絶えずして、しかも、もとの水にあらず」である。

しかし、いつか明らかになるであろう真実のために、図書館は歴史という名の記憶をため込んでおきたいものである。(編集子M)